

平成29年度 国東市：大分県学力定着状況調査結果（小学校：国語）

1 結果のポイント

・偏差値はわずかに知識が50を下回ったが、活用は50を上回った。昨年度に比べると、知識が1ポイント下回った。

偏差値	小学校国語		
	知識	活用	全体
国東市	49.6	50.1	49.7

・領域別ではどの領域も目標値を上回った。昨年度課題が見られた「話すこと・聞くこと」の領域では目標値を上回った。

領域別の正答率と偏差値

領域	正答率		偏差値
	国東市	目標値	
話すこと 聞くこと	89.2	75.0	50.9
書くこと	71.9	58.3	50.5
読むこと	81.7	76.4	49.5
伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項	71.8	69.2	49.0

・領域別の偏差値を見ると、「読むこと」と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が偏差値50を下回り、課題があるとみられる。

・問いの内容別に見ると、「漢字を書く」において正答率と目標値が同じでやや課題が見られるが、他の内容ではすべて目標値を上回っている。

※目標値と偏差値50に達していない項目に網かけ

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

(1) 書くこと・読むこと

①与えられた情報を読み取り、ポスターに補足する分を書くことができる。

<指導事項・書くーウ／オ、読むーエ> 正答率44.2%・目標値45.0%【活用】

・「アとイの内容をもとにして書きましょう。」とあるので、「指の間」のあらい方について書かれてあることをアから情報を拾い上げる必要がある。

・また、それだけでなく①～⑥のそれぞれの文を読み、その文の構造がどうなっているかを、知っておく必要がある。例えば①を見ると、

石けんをあわだててこすり、手のひらをあらおう。

あらい方のコツ 場所 文末を呼びかけの形で

となっていることがわかる。このような構造を理解した上で、拾い上げた情報を文章にする必要がある。

・情報をどこから収集するのか、それをどのように生かせばいいのかという情報活用能力を伸ばすことをねらった設問であるので、目的や意図に応じ、よりよい表現の仕方について考えたり、友だちの書いた文章に対して助言したりすることができるような学習を積み重ねていく必要がある。

(2) 国語の特質に関する事項について

③① 文の構成（連体修飾語）について理解している。

（連体修飾語 正答率55.2%・目標値60.0 【知識】）

(例) 旅行に行った 友人から 旅先の 写真が とどいた。

「写真が」をくわしく説明している言葉は・・・という設問に

- 1 旅先の・・・0.4%
- 2 友人から・・・22.1%
- 3 旅先の・・・55.2%
- 4 とどいた・・・21.5%

・誤答の理由として「2」を選択した児童「友人から一写真が」という言葉の組み合わせに違和感を覚えなかったためであろう。「4」を選んだ児童は、『写真が』がくわしくしている言葉ではなく、ど「どうしたのか」と設問を読み違っていると考えられる。

② 文の構成（連用修飾語）について理解している。

（連用修飾語 正答率 29.7%・目標値 30.0%）【知識】

（例）来週、わたしたちが 神社の そうじを 行います。

「来週」はどの言葉をくわしく説明していますか・・・という設問に

- 1 わたしたちが・・・15.7%
- 2 神社の・・・16.9%
- 3 そうじを・・・37.2%
- 4 行います・・・29.7%

・連用修飾語は、連体修飾語に比べ、修飾・被修飾の関係がとらえにくいと考えられる。特に、本問のように、副詞や形容詞、形容動詞ではなく、名詞による連用修飾語については、指導の工夫が求められる。

・連体修飾語と連用修飾語の違いについては、今年度も課題がみられた。

・連体修飾語と連用修飾語の違いをおさえた指導が必要である。文節数が多くない文を例文にして、修飾、被修飾の関係を構造的に理解させる。例えば、修飾・被修飾の関係は必ず被修飾語が修飾語の下に来るということを理解させようとして、「来週」が下の①～④のどこに入るのかを考えさせ、その中で一番下に来る箇所が答えとなることを子どもたち自身に発見させることも大切である。

① わたしたちが ② 神社の ③ そうじを ④ 行います。

・国語の特質に関する事項については、言語活動を行う中で指導する他、取り立てて指導することが有効である。

② 第4学年配当漢字を読み書きすることができる。

（漢字を読む 正答率 63.4%・目標値 75.0 漢字を書く 正答率 66.9%・目標値 75.0）【知識】

・第4学年の配当漢字の読み書きにおいては、問題によって目標値に到達していないものがある。

漢字や文法等については、日常的に学習することで定着度が上がる。言葉による学習環境を学校全体（家庭学習も含む）で整えることが大切である。

（3）読むこと（4）物語文

①登場人物の気持ちを読み取る。（1）正答率 91.3%・目標値 85.0%【知識】

（3）正答率 83.7%・目標値 80.0%【知識】

（4）正答率 72.7%・目標値 65.0%【活用】

・「読むこと」領域においては、領域別正答率が昨年度の 66.9%から 81.7%とアップし、目標値を上回った。ただし、偏差値は 50 に達しておらず、達成率で見ても、67.4%と 7 割を切っている。今後とも重点的な指導が必要である。

・今後も文章全体を素早く理解する力と、必要な部分を的確に判断し詳細に読む力の両方が必要である。

・4 （1）姉が輝矢に会いに来たという状況のみをとらえて解答せず、落ち着いて登場人物の気持ちを読み取る必要があった。誤答を選んだ理由は、姉が心配してくれていた状況に「びっくりした」という主人公の気持ちを正確に読み取れていなかったためだと考えられる。

・4 （3）物語全体のあらすじをつかみ、姉だけでなく、家族全員が輝矢のことを気にかけている様子を読み取る必要があった。誤答をえらんだ理由は、登場人物の関係や場面の状況が読み取れていなかったためだと考えられる。

・4 （4）物語全体を読んで、家族の行動から気持ちの表れを読み取る必要があった。誤答を選んだ理由は、父や母、おばあちゃんがなぜそんな行動を取ったのか、直接的には問題文に書かれていないので、その背景にある気落ちを読み取ることが難しかったからだと考えられる。

・登場人物の気持ちを読み取る力をつけるためには、「読むこと」の単元において、学習指導要領の言語活動例「ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと」「エ 紹介したい本を取り上げて説明すること」等を通して、登場人物の関係を示したり、人物の心情の変化を説明したりする学習を行う必要がある。

・実際の指導にあたっては、まず物語の設定や登場人物の関係、場面の状況等からあらすじをつかませる。そして、会話文や気持ちを表す言葉などの叙述をもとに、登場人物の様子や気持ちに焦点をあてて読んでいくよう指導する。その際は場面ごとの読みではなく、物語の全体像を把握しながら必要に応じて叙述に立ちかえり細部を読んでいくような言語活動が求められる。

・物語文の読みに必要な「あらすじをつかむ」「会話文や出来事などから登場人物の関係をつかむ」「人物

の心情の変化をつかむ」言語活動、また「指示語の示すことを理解する」「語彙をふやす」といった基礎的知識を習得する言語活動を、各学年で年間を見通しながら行い6学年で系統的に力をつけていきたい。

(3) 書くこと

- ・相手や目的に応じて書く力をつけるために、「書くこと」の単元において、学習指導要領の言語活動例「疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりすること」「ウ 収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書くこと」等を通して、一定量の文章を書く学習が必要である。
- ・実際の指導にあたっては、日頃より同程度の文章に書き慣れさせること、話の中心は何か素早く判断し記述すること等に力を入れることも大切である。
- ・課題や条件に沿った文章を書かせる際の指導として、「全体としてよく書けているからよい。」とするのではなく、条件（文体、字数、2段落構成など必要な情報）に沿って書けているかを丁寧に見て、過不足等があればどこをどのように修正すべきであるのかを理解させた上で、加筆修正させるという指導を行う必要がある。そうすることで推敲する力も向上すると考えられる。

3 指導の改善のポイント

(1) さらなる言語活動の充実

- ・国語科は、児童に付けたい力を付けるために、言語活動を単元全体で取り扱い、言語活動を通して指導事項を指導する教科である。国東市でも言語活動を設定した授業改善が進みつつあるが、今後もさらなる言語活動の充実を図り、授業改善を推進していく必要がある。
- ・単元を構想する際、付けたい力とそれにふさわしい言語活動、教材はどのようなものかを適切に判断することが求められる。そのために、
 - ①マトリクス型の年間指導計画を作成し教材と指導事項を確認すること
 - ②学習指導要領の言語活動例を確認すること
 の2点については早い段階で行っておく必要がある。(①は年度内に随時見直しをする)
- ・望ましい言語活動や付けたい力をイメージするために、国立教育政策研究所が作成した
 - * 「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例」
 - * 「小学校国語科映像指導資料～言語活動の充実を図った『読むこと』の授業づくり～」<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryu.html>
- ・「平成28年度『小学校学力向上対策支援授業』 個に応じた指導の手引き 小学校 国語科・算数科編」等を参考にすることも非常に有効である。

(2) 多様な図書資料等を有効に活用する授業の推進

- ・目的に応じた言語の能力を身に付けさせるために、国語科の教科書だけでなく、多様な図書資料等（書籍、新聞、リーフレット、パンフレット、説明書等その他のメディアからの情報）を用いることが必要である。
- ・多様な図書資料等を活用する中で、必要な情報を素早く見つける読みや、必要な部分のみを詳細に分析する読みの指導が可能となる。
- ・また、自分の考えを深めたり広げたりするためにも学校図書館等を活用し、多様な情報を関連づけて読むことの指導にあたる必要がある。学習指導要領の言語活動例を参考にし、情報を活用して、条件に応じて自分の意見や考えを表現する活動の充実を図るとともに、考えを深めたり広げたりする「交流」の場面を単元の中に効果的に位置付ける指導が求められる。

質問紙 「あなたはこの1ヶ月の間に本を何冊くらい読みましたか。」(単位は%)										
	0冊	1～2	3～4	5～6	7～8	9～10	11～20	21～30	31以上	その他
全国	5.3	17.3	19.7	16.4	11.1	11.3	9.8	4.1	4.7	0.2
大分県	6.5	15.1	15.7	13.9	9.8	12.1	11.9	5.7	8.8	0.5
国東市	4.0	14.5	15.6	16.8	6.4	19.1	11.6	5.2	6.4	0.6

- ・質問紙からは、1ヶ月で1冊も本を読まない児童の割合は全国・県より少なく、9冊以上読んでいる多読

の児童は多いことがわかった。まとまった量の文章を素早く読むことが苦手な児童の学力を育成する基盤として、本に慣れ親しませることが求められる。また、豊かな思考には豊かな語彙形成が不可欠であり、それを促すという視点で読書指導を見直すことも必要である。

- ・不読者をゼロに近づけ、より一層本に慣れ親しませるために、一斉読書や教科の授業中に図書館の活用を推進していくことが大切である。

(3) 主体的な学びを促す「めあて」の設定や指導に生かすことができる「より具体的な評価規準」の設定

- ・単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、より具体的な評価規準「B 概ね満足できる状況」を設定する。
- ・この具体的な評価規準から本時のめあてを設定すること、また、評価規準に基づき、「C 努力を要する状況」の児童を見極め、「B 概ね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。
- ・学習の見通しを持たせ、学習の意味づけをさせることは有効であることから、「めあてー振り返り」「課題ーまとめ」を提示したり考えさせたりすることが大切である。

(4) 国語科授業で取り組むべきこと

- ・国語科では、言葉で思考を深めることが必要である。また、どのように思考するのかをきちんと理解させるためにも、教科書の巻頭・巻末等にまとめられている学習用語は、その学年で確実に指導することが大切である。既習の用語は授業で使い、指導者があいまいな言葉を使わないようにする。(学習用語を常に見えるところに掲示し、理解を促す取り組みも有効である)
- ・言語活動の成果物を掲示・展示することも効果がある。作成したものを互いに見ることで、励みになるとともに、ものの見方や考え方が広がる契機にもなる。

(5) 学校全体で取り組むべきこと

- ・漢字や語句、文法、表現技法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。繰り返し学習できる環境を学校全体で整える必要がある。また、家庭学習の課題として、定着のための学習をさせたり、国語科以外の教科の時間に既習の漢字を必ず使用するよう指導したりと期をとらえた指導が望まれる。
- ・全校一斉読書や各教科及び領域において学校図書館を活用し、活字に親しませていく。その際、文学的文章だけでなく科学的な読み物にも手を伸ばすよう、司書と連携してバランスのよい読書指導に心がける。
- ・また、学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を活用することも求められる(例 各新聞社から配信されているワークシートを短時間で行う等)。そのために、国語科だけでなく、各教科や領域において、図書館活用の推進をしなければならない。
- ・県「フォローアップシート」、くにさき地区研作成「フォローアップシート」等を効果的に活用する。